

第2号
2013年5月1日
発行者
がん哲学外来市民学会
〒385-0046 長野県佐久市前山321-3
がん哲学外来研修センター
電話0267-63-5369 FAX0267-63-5389
E-mail: info.shimingakkai@gmail.com
http://www.shimingakkai.org/

がん哲学外来市民学会 ニュースレター

Cancer Philosophy Clinic Association for the People

**新島襄生誕
170周年記念行事**

群馬音楽療法研究会
薬剤師
吉江 福子

「医療の国際化」を良く耳にします。インターネットという便利な時代になり、あらゆる情報が瞬時に届くようになりました。しかし、それが古い幕末の時代の先人達のように、新しい物についての感動や広く学ぼうとする情熱を持つ日本人が、現代の日本にどれだけいるのでしょうか。

私は今まで、良き同志と良き言葉とを交わし、目的に命をかけていくことが出来るか疑問を感じながら、がんと向き合って答えを探していました。

その中で「がん哲学」と出会い、黒船の時代に密航してでも海外を見たいという人達への関心が高まりました。日々狭い薬局で働く私にとって「医療人が広く歴史や文化を学ぶ必要がある」と気付いたことは、黒船を見た人達の様を考えが変わることでした。

がん罹患は「死」を意識し「ケア」と「ケア」の長期の闘いの元で患者と医療者が同志として闘いぬくものであると自分なりに解釈し乳がん患者サバイバーとして、また日々患者様に接する医療者として自分の出来ることへの模索を続けています。

その中で患者、医療者の心に必要なもの求め、人々が集まる場所として「がん哲学」があることを、昨年の佐久での「第二回がん哲学外来コーディネーター養成講座」で知りました。

各地の「がん哲学外来」には歴史的人物の名前が冠せられているようです。「新島襄がん哲学外来・カフェ」設立は、群馬人の「使命」かも知れません。そこで今、標記の行事の具現化を試みています。

折しも今年はNHK大河ドラマで「八重の桜」が始まりました。群馬県安中の藩士の子として生まれた新島襄から「ハンサムウーマン」と称され、注目されています。幕末時代に新たな事に挑む苦難は想像出来ないもので「折れてはならぬ心」が「がんと闘う心」と通じると感じるのは、私だけでは無いように思います。

それに相応しい「品格や格調」を持つシンポジウム開催が出来るとは未知数ですが、歴史の雰囲気のある場所で170年の時の流れに「がん哲学」というレールを敷き、最先端のがん治療を終着駅として走る行事にすることがまた自分の使命かと感じます。

まず共有して下さる同志を探すごとで、患者にとってがん治療の長いレールの中で理解し合える人を探す共通点があるように感じています。

対話の哲学

岩手県立中央病院
加藤 誠之

がん哲学外来が、喫茶店やホテルのロビーで行われていたら、一見、普通の会話と映るだろう。しかし、その内容を見れば「対話の哲学」であると頷かれるに違いない。デカルトは「我思う、故に我あり」と言ったが、この言葉に代表される個人主義的な哲学とは違う、対話＝双方向的、ソクラテス的ということである。

深い対話により働きかけを受けると、自らの心の深層に対する言語化が起こる。その瞬間に心の暗示的なものに対する気づきが起こる。今までの心のモヤモヤはこれであったのかと。同時に、この瞬間に心自体も根本的に変化してしまう。あたかも量子力学という不確定性原理のように。量子力学と違って人間の心では深化するという違いはあるものの、掴もうとすると変化してしまうのである。自ら変わろうとしない限り、人は変化しない。

がん哲学外来では、心の気づきとともに、何か指針となる言葉が示されている。哲学の根幹、宗教の確信に近い何ものかが示される時、理由はわからないが、その言葉に照らされて人の表情は限りなく明るくなるように見える。

がん哲学外来の源流 不連続性の連続性



がん哲学外来市民学会 代表
NPO「がん哲学外来」理事長
順天堂大学医学部病理腫瘍学教授
樋野 興夫

先日、ジュネーブを初めて訪問した。ジュネーブといえば、まず Paul Tournier (1898-1986) を思い出す。彼はジュネーブ生まれで精神科の医師だが、筆者は医学部の学生時代 (1977年) に、神戸の Paul Tournier の講演を聞いた。

人生の大きな出会いであった。どうして彼の講演を聴く場に導かれたのかは、思い出せない。

筆者は、今回のスイスへの旅に Paul Tournier の著作『聖書と医学』(赤星進訳・聖文舎発行) を携えた。1975年7月6日購入、7月16日通読と本末に記述されていた。21歳の医学部生の時代であり、40ページを超える本だが、至る所に赤線が引いてあり、まさに夜を徹して読んだことである。

「この人にとっても、彼に現在起こりつつあること―病氣、不安、悲しみ、困難―が問題なのである。彼はその出来事から何かを学び、決定を下さなければならぬのである。

彼はどこに助けを見いだすであろうか (P119) に、既に「がん哲学」と「がん哲学外来」のコンセプトがあり、再発見の、大変貴重な長旅の機内の読書の時間となった。

さらに、忘れてはならないのは、新渡戸稲造 (1862-1933) が、1920年に設立された国際連盟の事務次長の時代を過ごしたジュネーブである。

筆者は、会議を終えてから国際連合欧州本部 (旧国際連盟本部) の建物を見学し、それから徒歩でレマン湖に出て、まだ肌寒い湖畔の遊歩道を散策した。花時計、大噴水、さらに、サン・ピエール大聖堂では、カルヴァンが説教の際に使っていたという椅子を見た。「新渡戸稲造没80周年記念」の年に、国際連盟の地ジュネーブを訪れることが出来たのは不思議でもあり、『知的協力委員会』(1923年設立) の21世紀版』にとって大いなる静思の時でもあった。

2010年3月10日から始まった筆者のブログ『がん哲学ノート』は、ジュネーブで、先週、記念すべき第150回目を迎えた。「新渡戸稲造 (1862-1933) 没80周年」事業として、新連載「がん哲学学校」のスタートである。振り返れば、『21世紀の徒然草』↓「がん哲学ノート」↓「がん哲学学校」と「不連続性の連続性」である。それ以前に雑誌と新聞に連載されたものが『われ21世紀の新渡戸とならん』(2003年 to be 出版)、『われOrigin of fire たらん』(2005年 to be 出版)として単行本化された。その後、『21世紀の徒然草』は、『がん哲学外来』メデイカルタウンを追いもとめて『2008年 to be 出版』として出版されている。『がん哲学ノート』の一部を抜粋して『がん哲学』が細胞から人間社会の病理を見る『2004年 to be 出版』に追記されたものが、新版『がん哲学』(2011年 EDITEX)である。

ハンセン病の国立療養所である長島愛生園での講演会「神谷美恵子記念・がん哲学外来第6回カフェ in 長島愛生園」で「がん哲学外来」日本国の処方箋」を話す機会が与えられた。2012年7月12日以来の二度目の訪問である。今回は、他県からの参加も多数あり、岡山駅でマイクロバスが用意されていた。驚きであった。

講演の後、「神谷美恵子記念がん哲学外来第6回カフェ in 長島愛生園」が開催された。入所者、不登校生、参加者でテーブルに分かれてのユニークな「カフェ」であった。入所者と不登校生の対話は「風貌を見て心まで読む」病理学を専攻する筆者にとっては、感動的であった。境遇にかかわらず「人生の眼が開く」現実の学びであった。まさに「がん哲学学校」の雰囲気となった。

県外からの参加者の皆様とは、再び、マイクロバスに乗り岡山駅に向かい、駅前のホテルでお茶を飲みながらの貴重な交流の一時を持つことができた。

「がん哲学学校 in 長島愛生園」が開設されることが決定された。「がん哲学外来カフェ」&「がん哲学学校 in 長島愛生園」の歴史的誕生である。「がん哲学学校」は「地の塩」と「世の光」として時代に輝くことである。愛生園の副園長である大和先生の退職記念誌「われ21世紀のハンサム・ウーマン」八重とらん(大和豊子編集、神谷美恵子記念長島愛生園がん哲学外来カフェ発行)を帰りの新幹線で通読し、大いに感激した。

まさに「われ21世紀の新渡戸とならん」出版10周年記念事業に相応しい。今回の長島愛生園訪問は、忘れ得ぬ「生きる意味」人間性探求の旅となった。



編集後記

がん哲学外来市民学会
ニュースレター編集者
星野 昭江

信州小諸の我が家の、樹齢不明の老い桜は満開。老樹のそばには、彩りも豊かに水仙や芝桜が咲き誇っている。これほど早く、しかもいちどきに開花したとは。こんなに早い春の到来が、未だかつて有っただろうか。

「がん哲学」との出会いの歳月を正確に思い出せなくなった。が、心に深く刻まれて重なり合い、記されているのは、人々との出会いの温かい記憶である。

「カフェ」の扉をこわごわ開いて入って来た人が「私は癌に罹っています。癌という言葉を自分から声に出したのは、今日が初めてです」。体まで震えていた。

家族にも言葉として出せないでいた「癌」という一字の何という重たさ、苦しさ…。「思い切ったカフェに来て良かったです」私は独りではないのですね

「カフェ」で出会い、生き続けたいと希求しながら逝った人の面影が老樹の桜花に見え隠れしつつ、浅間山からの風に揺れている。

春爛漫。大自然の広く深い営みの中で「いのち」のバトンを笑顔で託してくれた人々のことを、ずっと忘れないようにと思う。

がん哲学外来市民学会第2回大会
日時/2013年7月6日(土)午前10時~
場所/東京ガーデンパレス 文京区湯島1-7-5
テーマ/がん患者を支える社会ネットワークの構築に向けて

- ワークショップ ●講演(岸本葉子・他)
- パネルディスカッション ●メデイカルカフェ

第3回がん哲学外来コーディネーター養成講座
日時/2013年10月5日(土)・6日(日)
場所/がん哲学外来研修センター 佐久市前山321-3
テーマ/がん哲学外来での対話

〈講座内容〉●がん治療最前線 ●特別講演 ●グループワーク ●地域別交流会 ●グループ発表 ●修了証授与式

募集要綱など詳細は、がん哲学外来市民学会公式ホームページに掲載しています。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

がん哲学外来市民学会ホームページ <http://www.shimingakkai.org/>

お知らせ



「がん患者を支える
社会ネットワークの
構築に向けて」

東海大学医学部血液腫瘍内科
安藤 潔

次期大会長としてご挨拶を申し上げます。
春を迎えた東京では七月六日に開催する第二回大会に向けて準備委員の皆さんが鋭意活動中です。プログラムの内容が確定しました。午前中は「特色別がん哲学外来報告」として各地のメディカルカフェの活動を紹介し、午後は「がん哲学外来市民学会への期待」として、がん医療に深く関わる四名の方からの講演を頂きます。その後、今大会のテーマである「がん患者を支える社会ネットワークの構築に向けて」と題したパネルディスカッションを予定しています。
戦後の日本では核家族化と都市化が進み、かつて豊かであった血縁、地縁がどんどん希薄になっていきます。一方でがん医療の変化も大きく、抗癌剤治療は入院から外来にシフトして、患者さんと医療従事者とのコミュニケーションも

希薄になっています。このように、かつては患者を支えていた基盤が揺らいでいる状況の中で、がん患者を支える社会ネットワークの構築は急務の課題であり、地域に根付いたメディカルカフェは大きな力を発揮できるでしょう。そのような期待を込めて第二回大会のテーマを決めました。また、今回の大会では、各地のメディカルカフェの活動をポスター展示して頂くスペースも用意し、全国の特色豊かなポスターを募集いたします。また、新しい試みとして会場での実際のメディカルカフェを準備委員により開設いたしますので、委員の皆様にはメディカルカフェ体験希望者をご紹介いただければ幸いです。

がん哲学外来市民学会は、市民と医療従事者が手を携えたユニークな学会です。国民の二人にひとりがんが罹患するということは、誰もががんと無縁で生きることができないということです。そのことに真摯に向きあおうというエネルギーを感じます。このような活動が続くことは高齢化社会を迎えるわが国で希望の光となることだと思います。

さらに、もうひとつの特徴は均質化を目指すのではなく、地域色を大切にしていることです。昨年の佐久の大会では秋の農村風景の中で、佐久総合病院と浅間総合病院を中心とした長寿全国一の医療



第二回大会に期待して
東海大学医学部血液腫瘍内科
白杉 由香理

の特色を感じることができました。今回は大都市東京ですが、その中でも下町、山の手、郊外と特色あるメディカルカフェが展開しています。東京ならではの大会にしたいと実行委員一同張り切っております。多くの会員の方々のご参加をお願いいたします。

第二回大会実行委員長としてのご挨拶を申し上げます。
昨年九月に佐久で開催された記念すべき第一回大会は、まさに一からのスタートであったのにも係らず、実行委員や運営に携わられた皆様方の献身的なご努力によって、大成功を納めたことはご記憶に新しいところだと思えます。それを受けての第二回ということでも私たちがも並々ならぬプレッシャーを感じつつ、日々準備を進めているところであります。

第二回大会はお茶の水が会場です。日本でも有数の学生街。樋野先生が所属されておられる順天堂大学、東京医科歯科大学、日本大

ソクラテスの
対話術を学びたい
―熱意に負けて―



哲学者 佐久市在住
かわだしげる

昨秋のある日、片桐孝子さんの訪問を受けた。いわく、「哲学を、ことにソクラテスを学びたい」とのことである。

孝子さんは「クアハウス佐久」の運営に携わり、健康工房SAKUという地域有志の集まりの中で健康増進・医療向上のために励んでおられる。また、順天堂大学の樋野興夫先生がたと「がん哲学外来市民学会」なる組織を立ち上げ、地域を超えた方々とともに活躍されている。

「がん哲学外来市民学会」：この学会には、このように「哲学」という名がついていてそれにちなんで「哲学」と言われるのならば、私は昔、医学部で哲学を担当していたが、このような集まりには全く無知なので、お役に立てないからとお断りした。
しかし、孝子さんはそれにも屈せず、東海大学の安藤潔先生の次のことを紹介された。「ソクラテスは哲学の産みの親

と言われていますが、その哲学は弟子達との対話の中に表現されたものです。対話の中から産み出されるという意味で、ソクラテスの対話術を産婆術と言います。ソクラテスが対話の中から哲学を産み出したように、患者さんとの対話の中からも、いろいろなものが産み出されるでしょうね」

この言葉聞いて、私は安藤先生の教養に感服するとともに片桐孝子さんのソクラテスへの強い関心を理解することができた。

しかし、だからといって、今の私に何ができるのか。医者でもなく、孝子さんの課題に関わりえない私に出来ることはと言えば、そのソクラテスの対話を『ソクラテスの弁明』などで、一緒に読むことぐらいのものだ。こんな消極的な私も彼女の熱意には負けて、とにかく一度やってみようか、という気になった。

当日。学習会の第一回目。会場（がん哲学外来研修センター）に来てみて、私は驚いた。なんと十名近くの女性、それも忙しいお仕事を持っていらっしゃる皆さんが、熱心に新潮文庫を読みこまれ、質問され感想を述べられる。生活に根ざしたお一人ひとりの発言はどれも興味深く、考えさせられるものばかりである。対話が単なるおしゃべりではなく、そこから何かが生み出されるとの予感がある。前述の先生がたのお言葉にどこで触れたいのかと、これからの成果が楽しみです。

第3回がん哲学外来
コーディネーター養成講座

平成25年10月5（6）日



実行委員長
北澤 彰浩

早いもので今年(2013年)の10月5、6日に第3回がん哲学外来コーディネーター養成講座が開催される運びとなりました。今から考えれば、その道のりは決して順風満帆ではありませんでした。

当初「がん哲学外来」さえよく理解出来ない中で「コーディネーター」の役割・資質って何？から始まり、その方々を養成していくことが本当に可能なかどうか、そのためにはどんなプログラムを作らないといけないのかという議論を夜遅くまで時には深夜まで行っておりまして。その作業中には議論が噛み合わず体調を崩す者まで現れました。まさに産みの苦しみでした。

しかし、その段階を何とか乗り越え、第1回を開催した後はスタッフの中にも何となく自信が芽生え、この養成講座は世の中が必

学医学部附属駿河台と三つもの大病院が集中している、日本一の大学病院の門前町でもあります。「がん哲学外来発祥の地」とでも言うべきお茶の水で第二回大会が行われる運びとなったことには、言葉で言い尽くせない縁のようなものを感じます。

今回のテーマは、「がん患者を支える社会ネットワークの構築に向けて」です。就労、社会保障、医療費負担などの社会的側面も早急の課題ですし、がん患者の「良き隣人」であろうとする私たちが、がん患者やその家族を支えるために取るべきアクションは何か、実際に各地でどのような活動がおこなわれているのか。知っておくべき情報や、検討すべき課題は山積みです。そのため今回の大会も、前回は負けずとも劣らない盛りだくさんな内容となりました。

午前の部では、各地のがん哲学外来から、それぞれ創意工夫がこらされた、ユニークな取り組みと現状についてのご報告をお願いしています。午後は四人のシンポジストの先生たちにご登壇頂き、それぞれ異なった角度から「がん哲学外来市民学会への期待」についてご講演頂きます。最後は、シンポジストの先生たちを中心に「社会ネットワークの構築に向けて」をテーマにしたパネルディスカッションをおこない、大会終了後には、メディカルカフェの開催も予定されています。

要としているという確証のようなものを持たない気がしました。そこで、第2回の案内の中に私は次の文を載せました。

「2008年に樋野興夫先生が「がん哲学外来」を世界で初めて開設されてから、わずか4年間に日本各地から自分達の地域でまたは自分達の病院で「がん哲学外来」を開催して欲しいという依頼が樋野先生のもとに寄せられました。実はそれぞれの地域に地域がん診療拠点病院が存在しているのですが、病院では患者さんの希望・要求に全ては応えきれないという焦りがあったのでしよう。

実際の樋野先生の「がん哲学外来」を訪れた患者さん達が、帰る時には来た時と全く違う晴れ晴れとした表情やすっきりとした表情になる方が多いのを経験して、自分達に足りなかつたものを認識することになったようです。

そして、その経験を踏まえて樋野先生が居られなくて自分達だけでも「がん哲学外来」や「がん哲学外来カフェ」を行おうという病院・グループが現れ、試行錯誤を繰り返しながら実践されています。

このような時代背景や現象を鑑みたと同時に、地域の皆様はやはり「がん」に関して病院ほどは堅苦しく

安藤先生も強調されておられますが、現在の日本では国民の二人に一人がんに罹患します。先日某県のがん対策キャンペーンに対するパブリックコメントの要請があったのですが、そのスローガンは「がんにならない・負けない・いのち輝く〇〇県づくり」というものでした。糖尿病や肥満などの生活習慣病と異なり、がんは自らの努力のみで罹患を防げるという疾患ではありません。私自身もこのスローガンを作った方もいつ罹患しても不思議ではありませんし、がん患者さんにとっても、今更「がんにならない」と言われても、空虚に響くだけでしょう。

がん対策キャンペーンや、予防医学の重要性は改めて述べる必要もないと思われませんが、がんを「仮想敵」のように捉えるのではなく、現在ないしは近い将来に「自らも得るもの」と捉えた上での対策が今、求められているのではないのでしょうか。「がん哲学外来市民学会」は、がん患者・一般市民・医療関係者が同じ認識の上に立って、がんについて考え続けている、我が国でも希有な集まりであると思えます。

蒸し暑い東京の夏空を吹き飛ばしてしまおうような、熱気溢れる大会になることと期待しております。皆さまとお茶の水でお目にかかれまことを、心より楽しみにしております。

なく、とは言えその場に行けば何か得るものがあり穏やかな気持ちになれる場や仲間を求めておられると強く考えるようになりました。

がん患者さんがどんどん増えていく現在、今後ますます多くなる地域で「がん哲学外来」や「がん哲学外来カフェ」を必要とする人達が増えていく可能性があり、その時に日本のどこでも受けられるよう準備を進める必要があると感じました。「がん哲学外来」や「がん哲学外来カフェ」を開催しようとすると、やはり中心となるコーディネーターが必要になります。(後略)

これを受け、第2回養成講座はがん哲学外来市民学会第一回大会と同時に開催であったこともあり、何と百三十五人の方が北は岩手県、南は福岡県からわざわざお越しくださいました。今年の第3回は過去二回の経験を踏まえてますます充実したものになります。その上、懸案事項であった「がん哲学外来コーディネーター認定委員会」も設立出来ましたので、詳細をお伝えすることも出来ると思えます。

皆様。今年の秋も佐久の地で再びお会い出来ることを心から祈念しております。

「清里カフェ」のあと

阿部 千鶴

(山梨県北杜市萌木の村)

「がん」と診断された当時私は東京の大きな病院に行きさえすれば治る、と思いきや...

以来、ずっと悩み、苦しみました。そして、医師から「がん」と告げられた他の患者さんたちは、



「清里カフェ」を立ち上げました。2012年12月21日

阿部さんは平成25年3月24日逝去されました(合掌)

「浅間対話カフェ」

池田 正視

(佐久市立国保浅間総合病院外科)

私の食に対する欲は歳を重ねても一向に衰えることを知りません

かかせてあげられないだろうか

日夜考え、胃の外科手術をしており... 自分も患者さんの立場

このような患者さんの立場に

立った診療は、通常の外来で十分可能だと言いたいところですが

現実的には時間的な制約もあり、患者さんに満足いく応対が出来

な外来にするよう努めていく所存であります

しかし、もし私の診療サイドに

対する要望が的外れだったら... 患者さんの立場に立った私の診療

はおかしなことになってしまいかも知れません

な強い態度で診療サイドが接するのは絶対に拙いと考えます



(上の写真)カフェスタッフ(下の写真)院長と筆者(右)

「カフェ」あずまや

東 英子

(あずま在宅医療クリニック)

平成25年1月12日に大阪府守口市に産声をあげました

毎週、患者さん、ご家族、ご遺族、一般市民、医療・介護従事者

「あずまや」では特にテーマは決めず、それぞれが自己紹介を兼ねて

「あずまや」はマンシヨンの一室で開催しているのですが、この日は満員御礼でありました



「あずまや」に詰め掛け、熱心に樋野先生のお話に聴き入るカフェの皆さま

金沢大学附属病院「がん哲学外来」の常設

山田 圭輔

(金沢大学附属病院麻酔科蘇生科)

私は、麻酔科医としての知識と技術を生かして、がんにより生じる身体的苦痛(痛みや呼吸苦など)

や病的な精神症状(せん妄や不安障害など)に対して、薬物療法あるいは神経ブロック等を用いて苦痛を軽減するよう活動してきました

の経過のなかで死を意識し、自身のことを無力、無意味、無価値と嘆き、絶望してしまうスピリチュアルペインに悩まされることも少なくありません

私は、樋野先生のがん哲学外来の考え方が、スピリチュアルペインに悩む患者本人あるいはその対応に悩む医療者に有用であると直感し、自分ができる範囲で応用実践してきました

同じような考えを持つ医師、看護師、遺族の方、がん経験者などが集まり「金沢がん哲学外来」を開

設し、平成24年初めより地域で活動してきました



金沢がん哲学外来」のメンバー(2012年9月・佐久市) 左から2番目が筆者

多摩・恵泉「がん哲学外来」カフェ

黒坂 秀信

(カフェ相談スタッフ)

多摩中央公園の一角にある施設「多摩市立グリーンライオンライプセン

ター」にて多摩市と恵泉女子学園大学、そして多摩市グリーンボランティア連絡会の三者の支援を受け平成24年6月9日に「カフェ」がスタートしました

正式名称は、「多摩市立グリーンライプセンター・河井道記念恵泉女子学園大学「がん哲学外来」カフェ」です

恵泉女子学園大学の母体である恵泉女子学園の創立者が河井道さんという女性で、新渡戸稲造氏の直弟子のひとりであったこと、樋野先生がこの大学の理事であること

多摩市の阿部裕行市長が掲げるメデイカルタウン構想から必然的にこの地での開催に至りました

カフェの相談スタッフは、多摩市グリーンボランティア連絡会の会員と恵泉女子学園大学の関係者を中心に成り立っています

今まで男性スタッフが多く、医師が参加したことがないという特徴があります

季節の花々と緑の癒し空間の中で、毎回、オーガニックコーヒーやお茶を飲みながら和やかな雰囲気で行われています

悩みや不安を抱えられた相談者が気軽に参加し、語り合うことで気持ちを抱えている人の存在を知ること、孤立感が解消され、互いに支え合うという気持ちが醸成されるようなカフェを目指しています



東京都多摩市立グリーンライプセンターこの奥にある会場で「カフェ」を開催

内村鑑三記念「メデイカルカフェ」が「がん哲学外来」

見 供 修

(国立病院機構沼田病院)

当院の「内村鑑三記念メデイカルカフェ沼田・がん哲学外来」は、がんサロン「ふれあい」の「メデイカルカフェ」と「内村鑑三記念がん哲学外来」とが発展的に融合して生まれております

「カフェ」は、毎週水曜日午後一時〜二時、がんサロン「ふれあい」のために設けられた閲覧室を使用し、一人であっても自由に立ち寄れて、お茶を飲みながら、パソコンなどを利用して情報も集める事ができる場として2012年1月からオープンしました



当院に研修に来た看護学生に「がん哲学外来」を熱く語る樋野先生

最後に、多摩市の「治し支える」地域完結医療体制(メデイカルタウン)構想の中に、本カフェが取り入れられるよう、活動中です

一方、「内村鑑三記念・がん哲学外来」は、内村鑑三生誕150周年であった2012年、七月に開かれた「今を生き、明日に生きる」公開講演会に樋野先生をお呼びしたことをきっかけに、一人の聴衆の希望を受けとめられた樋野先生の「偉大なるお節介心」からその年の十月に開設されました

「がん哲学外来」は、医療の専門化、高度化が却って専門領域との間に「すき間」を作り、その中で「痛み」を感じておられる患者様やご家族に対し、その痛み(トータル・ペイン)の軽減、解放を目指した働きであります

一度に大量に対応することができないというもどかしさも感じられる地道で裏方的な活動ですが、様々な責任を抱え、多忙の日々の中におられるにも関わらず、その合間を選んで「さりげなく」お越しいただく樋野先生に支えていただきながら、今後とも継続していきたいと考えております

神谷美恵子記念 「がん哲学学校」& 長島愛生園「への足音」

大和豊子

(国立療養所長島愛生園 副園長)

入所者が主体となり、我ら職員がサポーターとして開催している「カフェin 長島愛生園」を常設して半年、第6回記念に樋野興夫先生をお迎えし「対話カフェin長島愛生園 がん哲学外来」日本国の処方箋」を聴講する機会を頂きましたが、会場は満席、補助席を急遽運び入れることになった。

「会話と対話」「支える」と寄り添う」を肌で感じ身をもって納得できる場所が「カフェ」でした。樋野ワールドに触れた友人はファンとなり、カフェのあと「沈黙の対話を体験させて貰った」と素晴らしい言葉のプレゼントをくれました。今回は不登校生数人を招待させて頂きました。テーブルで暫く下を向いていた一人が、樋野先生と入所者の対話を聞いていて笑顔になり顔をあげてくれました。入所者は「80才をはるかに超え耳が聞こえにくくなり、後遺症で手足が不自由。視力の低下が著しく見えなくなってしまう不安が強い」、樋野先生が「ヘレンケラーはサリバン先生と出会って三重苦がなくならはしなかったが第四の目が開いた」とサラリと話され入所者が



会場の5ヶ所のテーブルは、溢れんばかりの熱気に包まれました。

お茶の水メディカルカフェ

榊友希

(カフェサポーター)

お茶の水メディカルカフェは、お茶の水クリスタルセンター(OCC)で毎月一回土曜の午後10時から開かれています。2013年5月から開始され、現在は毎回約40〜50名の方が参加されています。

カフェの特徴は、がん患者、家族、遺族が参加されるだけではなく、毎回全国各地から多くの方々が見学・参加されることです。「がん

ベッドサイド朗読について

池田紀子

(福島県立医科大学附属病院 臨床腫瘍センター 医療ソーシャルワーカー)

毎月、樋野興夫先生をお迎えしている「吉田富三記念福島がん哲学外来」で、あるベッドサイドでの「がん哲学外来」をきっかけに、読書が大変好きな女性の患者様の病室に私が伺って、樋野先生の著書『がん哲学外来』を朗読させて頂くことになりました。

朗読は一回につき2テーマ分の4ページと決め、出来るだけ毎日病室に伺うようにしました。ご退院されるまでの11回、ベッドサイド朗読をもちました。

朗読の間、患者様は目を閉じ、時々頷かれながら聞き入っておられました。読み終わると「ふうっ」とため息をつかれ、「すごいね」と仰っていました。朗読した箇所テーマから、例えば子育てで大切にしていたことなど、ご自身の心に浮かんだことを話して下さいました。

毎回、穏やかな空気のなかで時間が過ぎていきましたが、その日のご体調で今日は朗読を控えようかと思つた時も、患者様の方から「それじゃあ、いつものお話の続きをお願いします」と促して下さいました。

聴く患者様、朗読する側の双方

頂きました。その時同じテーブルに座っていた彼が笑顔くれたのでした。お客様からカフェの主催者になった瞬間で、愛生園には「がん哲学学校」を開校する使命があると感じるに十分な経験でした。

哲学外来やメディカルカフェがどんなものか知りたい」「樋野先生の個人面談を受けたい」「がん患者さんやご家族から学びたい」「メディカルカフェを自分でも開きたい」など様々な理由で、他の患者会や家族会に参加されている方やそのボランティアの方、医療従事者、企業関係者、またクリスタルセンターの方などが来られます。お茶の水駅から徒歩3分というアクセスの良い場所にあり、遠方からも来やすいのではないかと思います。カフェは、榊原寛先生の温かい司会で始まり、樋野先生のお話を20分ほどお聞きしてから6〜8人ごとのテーブルに分かれてお話をします。別室では並行して樋野先生の個人面談も行われています。各テーブルにはスタッフが入りませんが、そこでは立場の上下関係は一切なく、参加される皆さんが互いを尊重しながら、立場を超えた人間同士としての対話がなされています。お茶やコーヒーを飲みながら話されるテーマもテーブルごとに異なり、がん医療、家族関係、信仰など多岐にわたります。それぞれの立場から感じていることを共有していく中で、一人ひとりが新たな気づきや学びを得ています。これぞ「人間学」ですね！

「お茶の水メディカルカフェ」は、がん哲学外来メディカルカフェのモデルとしての役割を持つているのかもしれませんが、今後も時代の流れと共に新たな展開をみることでしょう。



第4回がん哲学外来シンポジウム

調剤薬局での「がん対話カフェin天神」

原田 剛光

(そうごう薬局天神中央店)

そうごう薬局天神中央店(福岡県)では月に一度「がん対話カフェin天神」を開催しています。がんの患者さんが抱えている気持ちを話し出せる場所として、調剤薬局で行う初めての試みです。私たちは、お薬についてのお話を

をする際、がんの患者さんから病気の悩み、副作用の辛さ、家族に對しての思い、生活で困っている事など様々な話を伺うことが多くあります。中には、家族や友人には心配をかけるからと私たちだけに打ち明けられる話もあります。また、副作用で悩んでいても、生活の中で何か楽しみを持つことで前向きに治療を続けているとお



樋野先生の講演会の後、カフェ立ち上げの経緯を説明する(壇上の左が筆者)。

にとつて、心を静かにして言葉に耳を傾ける「時」が与えられたと感じています。言葉の力を大事にして、これからはベッドサイド朗読を続けていきたいと思っています。



吉田富三記念「福島がん哲学外来」のメンバー

「がん哲学外来」に期待する

鷹野 昭子

(佐久市市民)

「がん哲学」という言葉に興味を惹かれ、市民公開講座を始めて、がん哲学外来コーディネーター養成講座を一回、二回と続けて受講しました。樋野興夫先生は「がん哲学外来は患者さんや家族

の方と医療者がじっくり話が出来る場である」と言われました。そんな外来があればどんなにいいだろうと思いましたが、「哲学」というのが私にはまだ理解できていませんでした。

かつて病院で働いていた時、私は多くのがん患者さんを看取りま

した。痛みと不信感に苦しみ、悶々として亡くなられたたくさんの方達の顔が思い出されてきます。院長が「頑張ってくださいね」と言つて病室の扉から外へ出て行った後、患者さんがポツリと「これ以上私は何を頑張ればいいのかでしよう」と言つたのですが、私は「そうですね。辛いですよね」といふしか言葉が見つかりませんでした。看護師として何も出来ない無力さを感じ申し訳ない気持ちのまま、今に到っています。

第二回の「がん哲学外来コーディネーター養成講座」を受講したあとは、重苦しかった気持ち少し楽になったように思います。がん患者さんがゆっくり心を開いてこれからの事や生活の事など話したり聞いたり出来る場が、「がん哲学外来」であつたり、「カフェ」であれば、そこには、共感する心を持ち心を込めて対応出来るコーディネーターの存在が欠かせないと思います。

養成講座のグループ討議ではがん哲学外来の目ざすもの、コーディネーターの役割について話し合いがされました。患者さんの本音を引き出すには、接し方話し方の学習は勿論のこと、がんに関する共通の認識をもち、自分の経験を生かして継続的にボランティアとして関わっていく事が求められると話されました。この講座で今まで私の中でモヤモヤしてい

た事がらが、少し晴れたような気がしました。先生方、スタッフの皆様にご感謝しています。



「がん哲学外来」コーディネーター養成講座」を2回続けて受講しました。

がんサロン「もくらん」

井出 美由紀

(佐久総合病院看護師)

佐久総合病院で月2回開催している、がんサロン「もくらん」をご紹介します。

がんサロン「もくらん」は、がん患者さんとご家族が気軽に不安や悩みを相談し、自由に情報交換できる場所を目指して立ち上げられ、二年半が経過しました。ひとりで抱える思い、悩み、辛さ、不安は、誰にでも話せるものではありません。でも人は「聞いてもらいたい、気持ちを理解してもらいたい」という欲求を心の奥底に持っています。人に話を聞いてもらうということは、とっても大事なことです。

「もくらん」には、聴くことのできるソーシャルワーカー、看護師などのスタッフがいます。わかってくれる人がいます。話すことで気持ちの整理がきたり解決

のヒントが見つかるかもしれません。

また、月に一回、ミニミニ講座も開催しています。始めてから9回、「お薬なんでも相談会」「食事と栄養なんでも相談」「ハーブティーを楽しみませんか」「手作りクリスマスリース」など様々なことに取り組んできました。ミニミニ講座をきっかけに、患者さん同士の会話も広がっています。勇気を出して扉を開けてください

また、月に一回、ミニミニ講座も開催しています。始めてから9回、「お薬なんでも相談会」「食事と栄養なんでも相談」「ハーブティーを楽しみませんか」「手作りクリスマスリース」など様々なことに取り組んできました。ミニミニ講座をきっかけに、患者さん同士の会話も広がっています。勇気を出して扉を開けてください



がんサロン「もくらん」 毎月第1・第3金曜日